

「テサロニケの信徒への手紙」⑩

再臨の使信があたえるもの

(一)テサロニケ四・一三〜五・二)

ツイッターで自主発表されたものが反響を呼び、それが大手出版社の目に留まって連載されることになったマンガ。タイトルは『よく宗教勧誘に来る人の家に生まれた子の話』という。試し読みを読んで胸が詰まった。このエホバの証人の旺盛な伝道活動の背後にあるのが切迫した終末論であることは間違いないところ。彼らはかつて一九一四年、一九二五年、そして一九七五年に世の終わりが来ると語り、「家や資産を売って開拓奉仕をするのは残された短い時間を過ごす優れた方法だ」と機関誌で述べていた。こうなればもう熱心になるなど言うのが無理というもの。閑話休題。今朝の個所は主の再臨を待たずに死んだ同信の友らのことを思い、憂いているテサロニケ教会の兄弟に対するパウロの励ましである。以下再臨について三つのことを考えたい。

一、再臨の使信は悲しみを拭い去る

信仰の先輩が待ち焦がれていた再臨

のイエスを見ずに死ぬに及んでテサロニケのクリスチャン達は悲しみにくれた。そしてパウロは悲しんでいる彼らに対して、ある事実を知るように促す。それがイエスの再臨である。しかし面白いのはその再臨の事実が更に一対の出来事に支えられていることである。イエスの死と復活である。私たちはよくイエスの十字架の死を強調するし、その強調は私たちに自らの深みをおうでも意識させる。しかしもし復活がなければ十字架は拷問と苦痛の道具以外の何者でもない(S・マックナイト)。復活の主を信じるからこそ、からだのよみがえりは単なる信仰箇条を超えて、真の希望になるのだ。パウロは失意にくれる彼らに再臨の主のさきがけとしての栄光の主の復活を明確に指し示したのだ。

二、再臨の使信は慰めのためにある

パウロはキリストにあつて死んだ者が生きていくものに先立って天に上げられることを述べ、更にキリストのいのちに与るものはひとり残らずインマヌエルの主を体験することを述べたあとに言う。「このことばをもつて互いに慰め合いなさい」これもまた興味深い。というのはキリスト教会の中で終末論は時に恐れを引き起こし、伝道へ駆り立てる道具として用いられることがままあるからである。確かに主のさびき

は不信者だけに臨むのではない。それは六節を見てもわかるとおりである。神はその行いに応じて全人類を裁かれる。しかし真に主のみこころのうちを歩んだ者にとつて、死は第二の死という奈落の底への通過点ではなく、ボンヘッファー牧師が語ったように新しいはじまりとなる。ゆえに信仰によつて新しい創造を生き、その道を歩きつた彼らは勝利者である。キリストにある死者の未来は良きものであることは定まつており、それを知るならば慰めが得られる。パウロはそう語るのだ。

三、再臨の使信は人を現世に集中させる

再臨について詳述したのち、パウロはこれを聞いた人の多くが考えるであろう問いに向かう。即ち「その日はいつ来るのか」である。しかしパウロは実に巧みだ。答えないのである。これはイスラエルの再興は今かと鼻息を荒くして詰め寄った弟子たちに「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです(使徒一・七)」というイエスの仕方とまったく一緒である。だが冒頭に言ったように、キリスト教やその周辺で何度となく、「〇〇〇〇年×月×日、終末がくる」といったクルクル詐欺(失礼!)が繰り返されている現状を見る。そういったメッセージが発せられると、極端な人々は保険を

解約し、仕事もやめて気もそぞろに主を待ち望む。しかしそれは全く間違っている。反対に真の再臨のメッセージは私たちに必要な悲しみと霊的・肉体的な怠惰から私たちを守り、今日という日を最善に生きるよう、私たちを励ますために語られているのだ。

* * *

間もなく五百回目の宗教改革記念日になるが、そのきっかけを作ったM・ルターには次のような逸話がある。「先生、もし再臨が明日、明後日あるとしたら、先生は明日一日何をなさいますか？」ルターはこたえた。「午前中は神学校で授業、そして少し休んでから、そうリンゴの木を植える」と。彼は更に続けて「夜寝て、目が覚めて、主のみ顔を仰ぐことが出来るのなら、こんなに幸いなことはない」と。終末、終末と言つて不安をあまり、その負のバネで伝道するのは間違いだ。またどうせ明日はないのだからと言つて財産を使い尽くすのも倫理的ではない。大事なことは主の復活と再臨の知らせによつてよき慰めを受け、その日に備えて一日一生で生きることだ。「備えあり」の生活をするとは即ち、仕事、趣味、生活を主にあつて喜び、感謝して普通に過ごすことである。アーメン。